

第一章 玉鬘の物語 蛍の光によって姿を見られる

[第一段 玉鬘、養父の恋に悩む]

今はかく*重々しきほどに(殿は今はこのように太政大臣という重い信頼を帝から授かり)、よろづのどやかに思ししづめたる御ありさまなれば(全てに余裕を持って取り計らいなさる御権限をお持ちなので)、頼みきこえさせたまへる*人びと(殿を頼りに申しなさっている御夫人方は)、さまざまにつけて(それぞれの身分に応じて)、皆思ふさまに定まり(皆が思い思いに暮らせる形に納まって)、ただよはしからで(路頭に迷う事も無く)、あらまほしくて過ぐしたまふ(全体に良好に過ごしていっしやいます)。 *「おもおもしきほど」は、注に<源氏、太政大臣、三十六歳夏五月。>とある。 *「ひとびと」は、注に<六条院や二条東院の御夫人方をさす。>とある。

対の姫君こそ(ただ対の姫だけは)、いとほしく(煩わしいことに)、思ひのほかなる思ひ添ひて(思いの外の悩み事が付いて回って)、いかにせむと思し乱る*めれ(どうしたものかとお困りのようで、)。かの*監が憂かりしさまには(筑紫にいた時の大宰府の地元の有力者の言い寄りが厭だったのとは)、なずらふべきけはひならねど(比べ物にならない雲上世界ではあったが)、かかる筋に(父娘姦淫など)、かけても人の思ひ寄りきこゆべきことならねば(およそ誰も考え付くようなことでは無いので)、心ひとつに思しつつ(自分の胸一つに思い悩んで)、「様ことに疎まし(変態で気味が悪い)」と思ひきこえたまふ(とお考えのようです)。 *「めれ」は婉曲表現の助動詞「めり」の已然形で、「姫君こそ」を受けた結びの形でもありそうだが、全体を事情説明文として下に続けて読む方が文の流れは良さそうに思える。 *「げん」は大宰府の判官(じょう、三等官、現地主任)で、注に<筑紫にいたころの大夫督(たいふのげん)をさす。>とある。

何ごとをも思し知りにたる*御齡なれば(姫は身分社会上の様々な御家事情を理解できる御歳なので)、とざまかうざまに思し集めつつ(源家と藤家との違いなどを、あれこれと考え合わせなさっては)、母君のおはせずなりにける口惜しさも(母君が生きていた場合の自分の身の上の可能性に思いを馳せては、既に亡くなってしまっている無念さも)、またとりかへし惜しく悲しくおぼゆ(また改めて残念に悲しくお思い為さいます)。 *「おんよはひ」は、注に<玉鬘二十二歳。前の「胡蝶巻」では、年齢のわりには男女関係に疎遠で無知であると語られていた。その間の経緯が想像される。>とある。それはそうかも知れないが、「またとりかへし(殊更に)」と続く文意に照らせば、「何ごと」を<世＝男女関係>と取って良いものか疑問だ。「とざまかうざま」はそれこそ色々となるだろうが、「母君のおはせずなりにける口惜しさ」とあることから、此处で姫が試みる母君が居たならという仮定想念は、「藤原家で育ったら、殿には会わなかったか、逆に正式に結婚した」とか「源氏家で母と共に育ったら、殿は時機を見て藤原大臣に必ず話を通したし、父のままで優しく見守ってくれた」みたいなことの組み合わせを考えた、のだろう。つまり、「何ごとをも思し知りにたる」は<男女関係>というよりは<社会生活上の事情が理解できる>という意味だ、と私は読む。何れにしても姫は恋愛を楽しみたかったらしいことが、「胡蝶」第二章第一段の対の姫から紫の上に宛てられた手紙の中で「いづ方にも皆心寄せきこえたまへり(何方の手紙にも、皆に姫は好意をお持ちなさっていたのです)」と記されている、と私は読んでいる。そして、母君が生きていたら姫のその願いも適ったかも知れない、と考えてみる。こうした記事からすれば、姫が藤原の派手好みの血筋を受け継いでいた可能性は高い。が、恋愛は興奮志向であり、楽しさが担保されているわけではない。が、足跡ではある。

大臣も(殿も)、*うち出でそめたまひては(姫に恋情を打ち明けなさってからは)、なかなか苦しく思せど(いっそう悩ましく姫をお思いなさったが)、人目を憚りたまひつつ(人目を憚って)、*はかなきことをもえ聞こえたまはず(一寸した褒め言葉も思うように聞かせることがお出来になれず)、苦しくも思さるるままに(それでも思いを断ち切れずお悩みのままに)、しげく渡りたまひつつ(足繁く出向きなさって)、御前の人遠く(御側に女房の居ない)、のどやかなる折は(二人きりになれた時は)、ただならず*けしきばみきこえたまふごとに(興奮を頭わに為さって体を求めなさるので)、胸つぶれつつ(姫は緊張に胸を詰まらせながらも)、けぎやかにはしたなく聞こゆべきにはあらねば(はっきりと拒み申せる御相手ではないので)、ただ*見知らぬさまにもてなしきこえたまふ(ただ未経験者として何も分からない振りで対応なさいます)。 *「うちいづ」はく口にする、言葉で言う>だが、「打ち出で初む」はく打ち明ける、恋情を吐露する>だ。が、いざそうはっきりと殿が姫に告白した場面が在ったかという、作者は具体描写を敢えて避けていて、それらしい場面は胡蝶第三章にいくつかあるものの、肉体関係に至ったかどうかも含めてボカしてある。そこまで読者の好奇心を煽りながら、建前としての未通は破綻しないような書き方をしている。場面によっては、ほぼ濡場にも見えて、作者の意図が良く分からない、もしくは作者も設定を迷っている、かのようにさえ感じる。それでも、胡蝶第三章第五段に「色に出でたまひてのちは」とあったり、此処に「うち出でそめたまひては」とあって、どこかの場面で殿は姫にくはっきりと劣情を吐露して迫った>のだ、と了解して置くべきらしい。 *「はかなきこと」はく取り留めのない口説き文句>。 *「けしきばむ」はく欲情して興奮を頭わにする>。 *「見知らぬさま」はく何も分からない振りで、少なくとも表向きの建前としては、姫は未通なのだろうが、殿の「色に出でたまひてのち(胡蝶第三章第五段)」の意向を知ってからは、兵部君や右近あたりに床捌きの特訓を受けたらしい感触はある。だとしても、性戯など考えた事も無い態度を貫き通して、殿の誘いを判らないの一点張りで拒んだ、ということなのだろう。何れにしても此処の文節は、相当に際どいせめぎ合いの記事だ。

人さまのわららかに(姫は性格が朗らかで)、気近くものしたまへば(親しみやすくいらしたので)、いたくまめだち(いたって真面目ぶって、父娘関係の変態性を嫌い)、心したまへど(殿の誘い文句に動じないよう、気を付けていらしたが)、なほをかしく*愛敬づきたるけはひのみ見えたまへり(それでも生来の愛嬌の良さばかりをお見せになります)。 *「あいぎやうづきたるけはひ」はく人に陰悪な表情を見せない>で、そういう人当たりの良い人は確かに居るし、そういう意味かとは思ふ。しかし、敢えて「なほをかしく(それでも実に)」とあると、つい<性反応が良い>ように見えるし、そう読める書き方にしている、ように見える。

[第二段 兵部卿宮、六条院に来訪]

兵部卿宮などは、まめやかにせめきこえたまふ(丹念にお手紙を遣しなさいます)。*御労のほどはいくばくならぬに(その御成果が然程上がらぬうちに)、*五月雨になりぬる(五月の梅雨入りになってしまつて早くも乱れて整わない成り行きになりそうな)愁へをしたまひて(懸念を抱きなさって)、 *「ごらう」は訳文では<御苦労>としてあるが、「労」は<功績>の意もあるようなので<御成果>としてみる。 *「さみだれ」は<梅雨>で、注に<五月は結婚を忌む風習があった。「神代より忌むといふなる五月雨のこなたに人を見るよしもがな」(信明集、五六)。>とある。また、「さ乱る(さみだる、乱れる・整わない)」との掛詞として良く使われる、とも古語辞典にある。「さみだる」は<破談>を意味するか。三月末の花見から、本格的な申し込みが始まったとすれば、まだ一ヶ月ほどしか経っていないが、宮の性急さは殿に似るのかも知れない。ただし殿は、内大臣と張り合っていた若い頃から、その性急さを隠したがるようだが。

「すこし気近きほどをだに許したまはば(もう少しお側へ伺わせていただけたら)、思ふことをも(思いの丈の)、片端(かたはし、一端だけでも)はるけてしがな(お見せしたいのですが)」

と(と手紙で)、聞こえたまへるを(申しなさるのを)、殿御覧じて(殿は御覧になって)、

「なにかは(何を拒むことがあろうか)。この君達の好きたまはむは(この貴公子たちの好色ぶりなら)、見所ありなむかし(味わい深い歌を詠むに違いない)。もて離れて(お断りは)な聞こえたまひそ(決して申されません)。御返り(お返事は)、時々聞こえたまへ(時々差し上げるようにしなさい)」

とて、教へて書かせたてまつりたまへど(文面まで教えて姫にお書き頂こうと為さったが)、いとうたておぼえたまへば(姫は自分に欲情を向ける殿が他の男を近づけさせようとすることに、ますます嫌悪を覚えなさって)、「*乱り心地悪し(体調がひどく悪いので)」とて、聞こえたまはず(お返事をお書きなさいません)。 *「みだりごこち」は<病氣、体調不良>。「悪し」は<あし>とある。古語辞典に<平安時代、物事の評価は「よし」「よろし」「わろし」「あし」の順であった>と説明がある。<わろし(少し悪い)>ではなく<あし(最悪だ)>ということ、らしい。

人びとも(姫付きの女房には)、ことにやむごとなく(特に家柄が良く)寄せ重きなども(信頼の置ける者も)、をさをさなし(殆ど居ません)。ただ、母君の*御叔父なりける、宰相ばかりの人の娘にて(参議だった人の娘で)、心ばせなど口惜しからぬが(教養の基礎が出来ている者が)、世に衰へ残りたるを(没落して生き延びていたのを)、尋ねとりたまへる(探し出して引き取っていた)、*宰相の君とて(宰相の君と言う女房で)、手などもよろしく書き(字などもきれいに書き)、おほかたも大人びたる人なれば(およその社会常識を備えた人なので)、*さるべき折々の御返りなど書かせたまへば(姫が形ばかりの御返信などを筆跡を似せて代筆させていらしたので)、召し出でて(殿はその者を呼び寄せなさって)、言葉などのたまひて書かせたまふ(文言を授けて書かせなさいます)。 *「おんをぢ」は、注に<夕顔の父三位中将の兄弟で、宰相になった人の娘。すなわち玉鬘とは従姉妹に当たる人。>とある。が、だとすれば夕顔と従姉妹なのであり、姫とは又従姉妹か、姫から見て従姉妹叔母に当たるだろう。 *「さいしゃうのきみ」は、注に<父親の官職名にちなむ女房名。上臈の格式。>とある。 *「さるべきをりをり」は、「大人びたる人なれば」書ける返事のようなので、心を込めた信書ではない型の決まった挨拶文、だろう。「胡蝶」巻第二章第三段に「わざと深からで(わざと恋の話題をはぐらかして)、花蝶につけたる便りごとは(季節柄の挨拶で手紙を返すのは)、心ねたうもてないたる(男の心を焦らす遣り方で)、なかなか心立つやうにもあり(かえって相手の気持ちを奮い立たせたりするものだ)。」と殿が返事の書き方を注意していた記事があった。そういう返事は男に変に気を持たせるので良くない、と言っていたのだが、ということは、姫がそういう返事をしていたことを殿が知っていた、ということと思われる。姫の筆跡に似せて書いていたからこそ、この者を代筆者として「召し出で」たに違いないので、「書かせたまへば」の主語は姫かと思う。と理屈は捏ねるが、「さるべきをりをり」の実体が私には掴めないのが、実感としてはさっぱり訳の分からない文ではある。

ものなどのたまふさまを(殿は弟宮が姫に言い寄りなさる様子を)、*ゆかしと思すなるべし(見てみたいとお思いに成ったようです)。 *「ゆかし」とは、如何にも遊び半分の印象だ。愉快犯とすら思わせる。此处で描かれる光君の姿は、実に悪趣味の権力者といったところだが、藤原姫はただの玩具なのだろうか。姫が男女経験の無いことは語られてをり、物語好きの耳年増でもあるらしいが、その性格は「なほをかしく愛敬づき

たるけはひのみ見えたまへり」なのであり、姫生来の気質を恋愛体質と殿が感じ取ったからこそ、殿は弟宮を引き込んでの遊び心が湧いた、と私は読む。だからこそ、姫は純愛志向では無いから殿に溺れないし、その意味での可愛げには欠けるし、だから面白いし、父娘変態を、というよりは多分パワハラを、嫌う。つまり、姫の不満の核心は、この遊びが殿の遊びであって、自分の遊びになっていない、という自意識の高さ、かと思う。夕顔よりは内大臣の気質を受け継いだか。恋愛と純愛、上戸と下戸、友好と信頼、裏切りと結託、などは人間社会の維持と発展に、などと大袈裟に言わなくても普通に世の中に在るし、どちらも有効と認識されるものだ。何が本当に頼りになるかは、その時々事情による。というのが作者の主張だろうか。

正身は(実は、姫ご自身は)、かくうたてあるもの嘆かしさの後は(こうした殿の出し抜けの理不尽なお申し出の後の情け無い気分で居る時には)、この宮などは(この宮などの手紙が)、あはれげに聞こえたまふ時は(情感こもった文面だと)、すこし見入れたまふ時もありけり(しばし心を留めなさることもあったのです)。何かと思ふにはあらず(その手紙を特にどう思うのではなく、相手が本気なら色よい返事をして結婚してしまえば)、「かく心憂き御けしき見ぬわざもがな(こんな不愉快な殿の気まぐれを見ずに済むかも知れない)」と、さすがに*されたとところつきて思しけり(さすがに浮かれ気分抜きでお考えでした)。 *「されたとところ」は<風流な部分=恋心>。「つく」は「付く」なら、そういう気持ちを<持って>ということらしい。が、姫は「何かと思ふにはあらず」とあって、文面に心惹かれている訳ではないことが既に示されている。つまり、姫は打算で男の気持ちを利用しよう考えている、というワケだ。だから、この「つく」は「尽く(尽きる、終わる、無くなる)」で、「されたとところ(浮かれた気分)」が無かった、という意味に違いない。

殿は、あいなく*おのれ心懸想して(殿が不届きにも人の心をもてあそばうと勝手に思惑を膨らませて)、宮を待ちきこえたまふも知りたまはで(宮を待ち伏せ申しでないこともご存じなく)、よろしき御返りのあるをめづらしがりて(色よい返事があったのを喜んで)、いと忍びやかにおはしましたり(宮はごくこっそりと西の対にいらっしゃいました)。 *「こころげさう」は<色気が刺激されてソワソワする気分>かと思うが、「おのれ」は自分だから<自分勝手に浮かれている>というワケだ。全くその通りで、語り手も思わず「あいなく(理不尽にも)」と言ったのかも知れない。なお、注には<形容詞「あいなく」は語り手の言辞、挿入語句。『完訳』も「「あいなく」は語り手の評」と注す。>とあり、確かに主語がある文ほどその人物の主体言動ではなく、概要説明の場合が多い。

*妻戸の間に(妻戸を入った廂の間に)御茵参らせて(おんしとねまゐらせて、宮のお座布団を差し上げて)、御几帳ばかりを隔てにて(姫の部屋とは御几帳で遮っただけの)、近きほどなり(近さという殿の配置決めでした)。 *この妻戸は対屋の南表かとは思いますが、東側なのか西側なのか、当時の生活感を知らない私には掴み切れ無い。何となく、東側とっておく。

いといたう心して(相当に計算高く)、空薫物(そらだきもの、ほのかな薫物の香りを)心にくきほどに匂はして(扇情的に漂わせて)、つくろひおはするさま(部屋を演出なさる殿の姿は)、親にはあらで(とても親心とは思えず)、むつかしきさかしら人の(よこしまで腹黒いものだが)、さすがにあはれに見えたまふ(その上気した風情はさすがに耽美なのでした)。

宰相の君なども、人の御いらへ聞こえむこともおぼえず(宮のお尋ねと姫のお返事を取り次ぎ申し上げることも要領を得ず)、恥づかしくてゐたるを(恥づかしそうにじっと座っているのを)、

「埋もれたり(もっと前に出て、しっかり取り次げ)」と、*ひきつみたまへば(殿が後の陰から早速に扇の先で突付きなさるので)、いとわりなし(とても困ります)。*「ひきつむ」は「引き抓む」と表記され<つねる>と古語辞典に説明されている。が、<つねる>というのは直か薄布の上からでない効果が無い。その近さは、この場面にそぐわない。「引く」は<引っ張る>かもしれないが、「延く(その延長で、そのまま直ぐ、成り行きで)」の意味でも接頭語になっている、と思う。「つむ」は<つまむ>なら<先の細いもので当たりを付ける、突く>とも解せる。何か棒の先で突付いたなら、重ね着の上からでも直ぐ気付くさうだ。例示の「扇」は私の勝手な思い付き。それぞれの位置関係が今ひとつはつきりしない。

[第三段 玉鬘、夕闇時に母屋の端に出る]

*夕闇過ぎて(日が落ちても月が隠れて)、おぼつかなき空のけしきの*曇らはしきに(はつきりしない雲行きの薄暗さに)、うちしめりたる宮の御けはひも(しつとりと落ちていて見える宮の御姿も)、いと艶なり(とても優美です)。*「ゆふやみ」は<日没後、月が出るまでの間の暗闇。また、その時分。宵闇。>と大辞泉にある。そして「よひやみ」は<月の出が遅くなる、陰暦 16 日ごろから 20 日ごろまでの、宵の暗さ。また、その時刻。特に、中秋の名月を過ぎてからの宵の暗さ。《季 秋》>とある。「宵」は<夜>だが、<古代では、一日のうち暗い部分を「よひ」「よなか」「あかつき」の三つに分けた>と古語辞典に説明されている。「過ぎて」が<その後>を意味するなら、この「夕闇」は夜の早い時間の初更(20 時過ぎ)で、今はその後の二更(22 時過ぎ)あたりの時間を示しているように見える。しかし注には、この文の説明に<五月四日ごろの夕方。四日の月が西の空にあるのだが、五月雨のころゆえ雲ではつきり見えない。>とある。「四日」と何故言えるのかは分からないが、先に「五月雨になりぬる」とあったので「さつき」は確からしいし、それも初旬らしいので、月は夕方には既に出ていたが、曇り空なので日没後はだいぶ暗い、という空模様は理解できる。だから「夕闇」は<夕方の暗さ>で、「過ぎて」とは<日没後の暗さ>を言っている、ようだ。ちらちらと参照する「京都府舞鶴海洋気象台」の「太陽と月の出入り時刻と月齢」のページで、月齢から見て旧暦五月四日に当たりそうな「2011-06-06」日付の各時刻を見ると、日の出「04:43」・日の入「19:11」・月の出「08:44」・月の入「22:32」とある。日没は夜の 7 時過ぎあたり。なんと月は夕方どころか朝の 9 時前には出ているらしい。勿論、およその目安だし、舞鶴は丹波・丹後・若狭の国境だが、今では京都府というところがこの物語に引く分には、何となく有難い。*「くもらはし」は<曇りがちな空模様>だろうが、それでは「おぼつかなき空のけしき」の重複なので、此处は<薄暗さ>の意味なのだろう。初夏だから、妻戸は開け放たれていたのだろう。蔀戸も開いていたかもしれない。しかし、曇りの夕暮れは暗い。灯を燃さなければ室内は真っ暗だ。まして日没後ともなれば、燭台は数箇所に置かれていた筈だ、などと考えるのは電化生活にどっぷり浸かった現代人の感覚らしい。此处は暗がりの風情の場面、である。

うちよりほのめく追風も(部屋の奥から妻戸廂に流れてくる風も)、いとどしき御匂ひのたち添ひたれば(実に風情を増すお香の匂いが立ち添っていたので)、いと深く薫り満ちて(とても深い陶醉感があって)、かねて思ししよりもをかしき御けはひを(殿は思っていた以上に優れた宮の御姿を)、心とどめたまひけり(印象深くお思いでした)。

うち出でて(宰相の君に言伝てて)、思ふ心のほどを*のたまひ続けたる言の葉(お気持ちを話し続け為さる宮の言葉は)、おとなおとなしく(とても穏やかで)、ひたぶるに好き好きしくはあらで(熱烈な恋情ではなく、大事にするとの優しい気遣いで)、いと*けはひことなり(いやに神妙でした)。大臣、いとをかしと、ほの聞きおはす(殿はとても興味深く聞き耳を立てなさいます)。*「のたまひつづく」は、注に<『完訳』は「聞こゆ」など謙譲語がないので、話す相手が宰相の君と分る>と注す。

>とある。 *「けはひことなり」と漢文調の言い回しをすることで、堅苦しさを表している、のだろうか。だとすれば、「ことなる(格別な、いつもとは違う)」「けはひ(態度)」は緊張感を思わせるが、女慣れした宮なので、緊張と言っても勝手に分からないのでは無く、いつも以上に期待値が高く、殊改まった気持ちでいる、のだろう。

*姫君は、*東面に引き入りて*大殿籠もりにけるを(部屋の東側に奥まって体調不良を理由に布団に入って横になっていらっしやいましたが)、宰相の君の御消息伝へに(宰相の君が宮のお言葉を伝えに)、みざり入りたるに*つけて(枕元に膝を進めるのに乗じて殿も姫に近付き)、 *「ひめぎみ」という呼称は源氏殿の目線でご娘>という意識なのだろうか。今さら殿に純粋な保護者は期待できないが、殿の意向としてなら<養女>も成立しないことも無い、とも思う。この文は、少なくとも姫の自覚では無く、文意からして語り手による客観描写でも無さそうで、殿の視線によるものらしい。因みに、「御方」は<対の管理者>、「女、女君」は<恋の相手>、「正身」は<自らの主体行動>ではありそうだが、それぞれが話者説明文なのか、殿や誰かの視点記述文なのかは、非常に分かり難い。が、古文にも関わらず、主語を省略しないばかりか、場面に応じて表記を変える書き方は姫の心象描写でもあるのだろう。が、主観性の強い文で事象説明に欠ける嫌いはある。ただし、客観性の省略こそが臨場感とは即ち言葉の根源的な力なのだ、とも思う。 *「ひんがしおもて」は母屋の東側の部屋かと思うが、西の対の間取りが良く分からないので、実は簡単には理解できない。まして、六条院は全体が特殊な構成だし、寝殿造り自体も基本形はあるようだが、実際には基本通りのモデルハウスは少ないとも聞くので、このように当たり前の様に室内を説明されても、まるで要領を得ない。とりあえず対屋は南北に長いように思うので、2間×4軒の母屋だったとすれば、東西が2軒で南北が4軒くらいを考える。この場面での配置は宮が妻戸近くの廂の間に案内され、姫とは「御几帳ばかりを隔てにて、近きほどなり」と説明されていたので、姫は廂近くに居るとすれば、宮は対屋東南角の東向きの妻戸から廂に入って戸口近くに北向きに着座し、姫は斜め奥の対屋南面の母屋に部屋居している、と想像する。この南面の居室の東側を東面と言っていると考えれば、私の想像はまだ破綻していないので、当面は此の仮読み進みたい。それにしても、殿は何処に居るのか。女房の動線は如何になっているのか。どうも分からない。ただ、此处は暗がりの場面である。母屋の南面は御簾が上げられ几帳越しに開け放たれていたとしても、東面は御簾が下げられていて、その東斜め廂から宮が西北を向いていたら、母屋の東側は実は死角である。だから殿は母屋の東南角の柱の陰に隠れていた、という大胆な配置も成立しそうだ。姫は居室の北側に奥まっていた。そして女房は居室の南側から妻戸廂とを行き来した。そうすれば、殿が女房を横から突付いたのも、宮の話に聞き耳を立てたのも、一応は成立する。そして、女房の後に付いて姫の枕元に近付いたことも可能となる。どうだろうか。 *「おほとのごもる」は<貴人が布団に入って寝る>という意味だろうから、私は意外だった。宮との対面に失礼にも程がある。有り得ない、と感じた。何故なら、私は姫が仮病だと知っているからだ。姫は源氏殿が宮に返事を書かせようとした時に、<いとどうたておぼえたまへば(姫は自分に欲情を向ける殿が他の男を近づかせようとすることに、ますます嫌悪を覚えなさって)>、「乱り心地悪し(体調がひどく悪いので)」とて、聞こえたまはず(お返事をお書きなさいません)。>とあって、殿は宰相の君に代筆させたのだから。しかし、その事情説明は全て殿の目線によるものだった。姫にしてみれば、体調が悪いと言っているのに、それを無視して、というか殿は仮病を見抜いてだが、事を運ぶ源氏殿に相当な反発を覚えたに違いない。カチンと来た。相手がそう来るなら、コッチは意地でも仮病を通すし、本当に病気になってしまいたいくらいの心境だったのかも知れない。こういう率直な感情の遣り取りが出来る、この姫の負けん気の強さが、姫の面白さであり、この姫の話の面白さだ。つまり、この悪ふざけは一義的には殿と姫の遊びなのであり、宮はトバッチリを受けた形だが、宮もそれなりに遊べるのだから良いか、と殿は考えたのだろう。というわけで、源氏殿は悪乗りを重ねる。それに殿は、姫が宮に、たとえ打算ずくであろうと、興味を持っていることも知っている。そういう場面だ。 *「つけて」は、注に<源氏が宰相の君がいざって入って行く後について、の意。>とある。「付く」は<その際に付随する>くらいの意味しかないから、<

後について>と知れるのは、下文の先取りに違いない。先取りは避けたいが、ある程度は先読みをして全体を見ないと意味が取れないことは、この物語には確かに多い。

「いとあまり*暑かはしき御もてなしなり(そんなに重病そうに寝込んでいては宮に失礼です)。
*「あつかはし」は<暑苦しい、重苦しい>と古語辞典にある。「もてなし」は<態度、物腰、対応振り>。だが、暑苦しい物腰や重苦しい対応という言い方は分かり難いし、重々しい態度が偉そうな態度という意味なら、姫はとてもそうは見えないし、現場の会話でそんな曖昧なことを言っている場合とも思えない。ところで、「し」は過去の助動詞「き」の連体形で、動詞に付いてその動作を客体視して形容詞化する語、かと思うが、であれば、「あつかふ」は「熱かふ」ともあり<熱病に苦しむ>と説明されるので、「あつかはし」は<重病そうに>とも読めそうだ。更に、「かふ」は「がふ(～できる、～がる)」や「かう(～しかかる、～がち)」に通じるか混同する語感なので、「あつかはし」は<「あつし」勝ちな様子>にさえ見える。「あつし」は「厚し(身分が重い、重々しい)」、「熱し(暑い、熱がある)」、「篤し(重篤だ)」、などと含みが多い。だから多分、この「あつかはし」は多義で用いた洒落言葉なのだろう。まずは、現代語の「厚かましい(偉そうで失礼だ)」と同義でくそのように横になっていては、余りにも失礼な態度ではないか>という叱責。そして、それを「無礼なめり」と言わずにわざわざ「暑かはし」という心は、<いくら重病そうにしても、そんな仮病は通じないぞ>という殿の攻勢の明示である。その念押しが次の文、かと思う。

よろづのこと(何でも)、さまに従ひてこそ*めやすけれ(限度を心得てその場に合った対応をしてこそ主張は認められるのです)。 *「目安し」は<見苦しくない、感じがよい>とある。また、「めやす」は<許容基準値>でもある。此处では殿はその理屈を言っている、と思う。

ひたぶるに若びたまふべきさまにもあらず(聞き分けなく駄々を捏ねず、)。この宮たちをさへ(このような宮さまという身分の方などに対してまでも)、さし放ちたる人伝てに聞こえたまふまじきことなりかし(遠ざけて人を介してお話しなさるべきではありません)。御声こそ惜しみたまふとも(直に話すほど御声をお出し為さらないとしても、失礼の無い様にせめて直答の気配だけでもお分かり頂く為に)、すこし気近くだにこそ(もう少し近付きなさいませんか)」

など、諫めきこえたまへど(ご注意申しなさると)、いとわりなくて(姫は困り果てて)、ことづけても(病気だと言い訳しても)はひ入りたまひぬべき御心ばへなれば(殿は本当に悪いのかと布団の中にまで入って来てしまわれる御心算のようなので)、とざまかうざまにわびしければ(仮病を通すためにも殿を避けるためにも仕方なく)、すべり出でて(布団から滑り出て)、母屋の際なる御几帳のもとに(居室の南際の御几帳の近くに)、かたはら臥したまへる(脇息にもたれて半身に成りなさいます)。

[第四段 源氏、宮に螢を放って玉鬘の姿を見せる]

何くれと言長き(あれこれと長い宮のお話の)御応へ聞こえたまふこともなく(お返事を何も申しなさることも無く)、思しやすらふに(お応えに思い迷っていらっしゃる姫に)、寄りたまひて(殿は近付きなさって)、御几帳の帷子を(みきちゃうのかたびらを、几帳台の垂れ幕を)一重(ひとえ、一枚)うちかけたまふにあはせて(横軸に掛け上げなさると同時に)、さと光るもの(サツと光るもの、を放ちなさいますと、)。紙燭を(しそくを、簡易松明を)さし出でたるかとあきれたり(差し出されたかと姫は驚きました)。

蛩を*薄きかたに(殿は蛩を紙袋に)、この夕つ方いと多く包みおきて(この夕方に何匹も集め入れて置いて)、光をつつみ隠したまへりけるを(光を包み隠してあったものを)、さりげなく(解き放つとは無しに、それとなく)、とかくひきつくろふやうにて(御几帳の帷子を手直しする様子だったので、)。 *「うすきかた」は、注に<諸説あり、不明の語句。『新大系』は「かた」は「かたびら」の誤りか。帷子の裏のこととも。諸説あるが未詳」と注す。>とある。「未詳」なので勝手に解釈するが、私には「薄きかた」は「ひきつくろふ(御几帳の帷子を、手直しする)」に掛かる修辞では無しに、「包みおきて光をつつみ隠したまへりける」何かを言っているように見える。で、「薄様(うすやう、鳥の子紙の薄いもの)」で作った袋を想定する。

にはかにかく掲焉に光れるに(急にこのように明るく光ったものに)、あさましくて(呆気にとられて)、扇をさし隠したまへるかたはら目(扇を開いて隠しなさる姫の横顔が)、いとをかしげなり(とても綺麗でした)。

「おどろかしき光見えば(不意に光が差せば)、宮も覗きたまひなむ(宮も覗きなさるだろう)。わが*女と思すばかりのおぼえに(今までは、私の娘ということだけで宮は期待を持って)、かくまでのたまふなめり(このように熱心に口説きなさっていたのだろう)。人ざま容貌など(人柄や器量などが)、いとかくしも具したらむとは(こうまで見事に備わっていなさるとは)、え推し量りたまはじ(まずお考えでは無かったに違いない)。いとよく好きたまひぬべき心(出来るだけ宮の好色心を)、惑はさむ(搔き立ててみたいものだ)」 *「女」は「むすめ」。

と、かまへありきたまふなりけり(企んで彼是と仕掛けなさるのでした)。まことのわが姫君をば(姫が実の娘であったなら)、かくしも(こうまでして)、もて騒ぎたまはじ(悪不遜戯けなさいますまい。)、うたてある御心なりけり(困った遊び心なのです)。

こと方より(殿はその妻戸とは別の出口から)、やをらすべり出でて(そっと抜け出て)、渡りたまひぬ(その場を立ち去ってしまいなさいました)。

[第五段 兵部卿宮、玉鬘にますます執心す]

宮は、人のおはするほど(姫のいらっしゃる所を)、さばかりと推し量りたまふが(あの辺だろうと見当を付けていらしたが)、すこし気近きけはひするに(意外と近くにいらしたので)、御心ときめきせられたまひて(御心をときめかせなさって)、えならぬ羅の帷子の隙より見入れたまへるに(美しい薄布の垂れ幕の隙間から目を見張りなさった時に)、一間ばかり(ひとまばかり、ほんの柱一間ほど)隔てたる見わたしに(隔てて見渡した向こう側に)、かくおぼえなき光のうちほのめくを(このように思いがけなく光が瞬くのを)、をかしと見たまふ(面白くお思いです)。

ほどもなく紛らはして隠しつ(直ぐに宰相の君が垂れ幕を下ろして何も無かった様に取り繕いました)。されどほのかなる光(けれどもその一瞬の光は)、艶なることのつまにもしつべく見ゆ(情事の始まりにもなりそうな風情に思えます)。ほのかなれど(仄かに見えた)、そびやかに臥したまへりつる(背が高そうに流し身でいらした)様体の(やうだいの、姫の姿の)をかしかりつるを(美しそうだったのを)、飽かず思して(もっと良く見たくお思いになったので)、げに(確かに)、このこと御心にしみにけり(この趣向は宮の御心に印象深かったのです)。

「鳴く声も聞こえぬ虫の思ひだに、人の消つには消ゆるものかは（和歌 25-01）」

「声も出さない螢の火、点けば消せない燃える恋（意識 25-01）」

*注に＜螢の宮から玉鬘への贈歌。「思ひ」に「火」を掛ける。まして私の恋の炎は消えるものではない、の意。＞とある。訳文は「鳴く声も聞こえない螢の火でさえ、人が消そうとして消えるものでしょうか」とある。宰相の君が垂れ幕を下ろしても、一度点いた恋の火は消せない、ということらしい。

思ひ知りたまひぬや(私の思いは、いま御覧に成った通りです)」

と聞こえたまふ(と宮は仰います)。かやうの御返しを(こうした直答での御返歌を)、思ひまはさむも(技巧を考え回して作るのも)ねぢけたれば(場違いなので)、*疾きばかりをぞ(姫は即答こそを旨として、)。*「とし」は＜早い＞。即答。

「声はせで身をのみ焦がす螢こそ、言ふよりまさる思ひなるらめ」（和歌 25-02）」

「身をのみ焦がす螢こそ、言ふよりまさる思ひとぞ」（意識 25-02）」

*注に＜玉鬘の返歌。「鳴く声」「虫」「思ひ」の語句を受けて「声はせで」「身をのみ焦がす螢こそ」「言ふよりまさる思ひなるらめ」と返す。「思ひ」に「火」を掛ける。「音もせで思ひに燃ゆる螢こそ鳴く虫よりもあはれなりけれ」（重之集、二六四）。＞とある。「源重之(みなもとのしげゆき)」は紫式部と同世代か少し前の世代の有名な歌人、らしい。官位は従五位下とあるから、中級貴族だったか。それにしても、当歌は引歌の丸写しで、これでは下敷きというよりは、言い換えなしいし盗作だ。それでも、返歌としてみれば＜あなたの深いお気持ちは分かる気がします＞くらいには成るだろうか。まさか＜火照った体が思いの証し＞みたいな都都逸を姫が言うとも思えない。しかし、「らめ」は＜なのでしょうか＞みたいな頼りなさだ。それに此処まで似た歌だと、そういえば螢にはこんな歌がありましたねえ、みたいな感じで、「声も聞こえぬ」はこんな風に既に詠まれてもいますしねえ、良くこう言うようですしねえ、みたいに軽く受け流したようにも見えてくる。意図が良く分からない歌だ。

など、はかなく聞こえなして(つかみ所の無い答えで形だけは取り繕って)、御みづからは引き入りたまひにければ(殿が去りなさったからか、御自身は奥まってしまいなさったので)、いとはるかにもてなしたまふ愁はしさを(宮は女房の取次ぎで、ひどく遠まわしにお話し為さる姫の用心深さを)、いみじく怨みきこえたまふ(実に残念だとお話しなさいます)。

好き好きしきやうなれば(しかし何時までもそのままでは、物欲しさが過ぎるようなので)、みたまひも明かさで(長居も夜明け前までにして)、*軒の雫も苦しさ(軒の雫の冷たさに別れを惜しんで)、濡れ濡れ夜深く出でたまひぬ(雨と涙に濡れながら夜深くお帰りなさいました)。*時鳥など(ほととぎすなど、古歌に不吉と歌われたホトトギスなども)かならずうち鳴きけむかし(きっと鳴いていた事でしょう)。うるさければこそ聞きも止めね(そんな鳥の音が煩いように、こうした湿り話は煩わしいので、もう止めましょう)。*「のきのしづく」は、注に＜『集成』は「「軒の雫」は歌語で、悲しみの涙の譬喩。五月雨と宮の悲しみの涙を重ねた趣の文飾」と注す。＞とある。*「時鳥」は、注に＜「五月雨に 物思ひをれば ほととぎす 夜深く鳴きて いづち行くらむ」（古今集夏、一五三、紀友則）。『集成』

は「以下、草子地」。『完訳』は「以下、語り手の弁。果たせぬ恋のまま立ち去る類型的な場面ゆえの省筆」と注す。＞とある。

「御けはひなどのなまめかしさは(宮の御雰囲気の優美さは)、いとよく大臣の君に似たてまつりたまへり(とても良く御殿様に似ていらっしゃいました)」と、人びともめできこえけり(女房たちもお褒め申していました)。昨夜(よべ)、いと女親だちて(いとめおやだちて、殿がまるで女親のような細かい気配りで)つくろひたまひし御けはひを(宮と姫の面会のお世話を為さったらしい御様子を)、うちうちは知らで(内情は知らないで)、「あはれにかたじけなし(本当に有難い)」と皆言ふ(と姫付きの女房たちは皆言うのです)。

[第六段 源氏、玉鬘への恋慕の情を自制す]

姫君は、かく*さすがる御けしきを(このように女房たちが褒める殿の親らしさは実は親らしからぬ悪戯と知り、しかしながら宮以上のさすがる若さと美貌の殿の御容姿を見て)、*「さすが」は現代語でもある。そして、今でも曖昧な語だ。古語辞典には<(さ)そうは(す)いっても(が)やはり>の意と説明される。確かに日常でも<見かけはそうでも結局は地金が出る>みたいな使い方をしているが、多くの場合にその地金は、劣ったものよりも優れたものであるような気がする。つまり普通は、比較優位を改めて認識して感心する時に使う。そして時には、改めて地金を認識して皮肉っぽくも言う。此处でも、その両意で考える。

「わが*みづからの憂さぞかし(これは自分の不運の方が悪いのだ)。*「みづからのうさ」は、注に<『完訳』は「己が運命を痛恨。源氏への恨みではない」と注す。＞とある。「ぞかし」は<△こそが▽に違いない>で、△が「自らの(存在、宿命)」、▽が「憂さ」、なのだろう。

親などに知られたてまつり(実の親や兄弟に自分の素性を知っていただき)、世の人めきたるさまにて(他の家の女として)、かやうなる御心ばへならましかば(殿がこうした御意向を私にお持ち為さるのなら)、などかはいと似げなくもあらまし(何もそんな不都合なこともないだろう)。人に似ぬありさまこそ(父娘の間柄という建前だからこそ)、つひに世語りにやならむ(どうしても不始末な世の語り草になってしまうのだ)」

と、起き臥し思しなやむ(寝ても覚めても思い悩みます)。

さるは(もう一方の当事者としては)、「まことに*ゆかしげなきさまにはもてなし果てじ(本当の所は内大臣の機嫌を取り損なって夕顔との思い出に影を落としかねない形にはしてしまいたくない)」と、大臣は思しけり(殿は思っていたのです)。*「ゆかしげ」は<心が行こうとする(関心が向く、引かれる)ようなさま>で、それを訳文では<一般受けがする→世間体の良さ>と解してか、「ゆかしげなきさまにはもてなし果てじ」を<体裁の悪い形にはしてしまいたくない>の意味と取ってある。広い意味ではそういうことかもしれない。が、殿の関心は一般的な体面ではない。殿自身にとっても、姫にとっても、二人は独立した血縁関係の無い大人同士であり、男女の仲に成ることは社会的な地位を危うくする関係ではないからだ。確かに、表向きは父娘と公言している二人が男女の仲に成るのは、そのように見られる今が今の一時は世間体が悪いし、姫にとっての危惧はその事に在ったのかも知れない。が、これは「大臣は思しけり」という文である。殿は「まことに」とまでに、その<世間体>を危惧する低い身分ではない。正面切って申し開けば、内大臣の娘であろうと、殿がその相手として不足である筈も無い。しかし、殿が姫を娘として世話していると言う体面は、姫を勢力拡大に利用でき

る一人前の京人に仕立てた上で、「夕顔の気持ちを汲んで自分がここまで世話をしたが、この姫は実は貴殿の娘です」と藤原殿に引き合わせれば、殿は自分を殺して内大臣の顔を立てたという恩人の立場に立てる、という計算である。その円満な雰囲気の中なら、夕顔との遭遇も全くの偶然として話を収めることも出来るだろう。だというのに、姫を自分の女にしてしまえば、内大臣の事情よりも自分の情欲を優先させた形となってしまう、内大臣に結婚の許しを願う男の立場に立たざるを得ない。だからといって表向きの世間体はいくらでも取り繕える身分ではあるが、殿は内大臣に恩を売る機会を失うのである。殿が十代の頃からずっと抱いている懸念は、姫との縁というよりは、夕顔との経緯であり、藤原殿に殿自身が負っている後ろめたさである。私は、光君の夕顔への思いの根底に藤壺の件があった、と思っている。これは多くの人が指摘する所かと思う。ただ、「藤壺の件」は＜藤壺への思い＞それ自体では無い、と私は思う。光君は藤壺との密通に底知れぬ不安を感じていた。深層で誰かの助けを渴望していた。その誰かが、当時の頭の中將、今の内大臣である。勿論、光君は義母との密通は絶対秘なので他人に相談できるわけでは無い。だから漠然と、知りうる中で最も信頼できそうな、しかし最も実質で競争相手である藤原兄を味方にしなかった。そこで、改めて彼への興味が起こり、その延長線上に現れた女が「夕顔」だったのである。「夕顔」が藤原殿の弱点ということではなかったが、殿は＜使えるコマ＞くらいの計算はしたのである。そして、「夕顔」は不思議な魅力を持ったまま早世した。それらは若い日の繊細で複雑な思いだったが、それはそのまま今の帝の後見者たる身分の太政大臣という境遇の土台になっていて、つまりは今も尚、同じ事情が続いているのである。早晚、姫の件、とは夕顔の件でもあるが、を光君は内大臣に打ち明ける心算だろう。結果として、打ち明けられず終いになっても仕方がないが、それでは光君の一人相撲に成ってしまうから、光君は基本的には内大臣に打ち明けたいのである。そしてその際に、光君が内大臣に値踏みされるか、信頼を勝ち取れるかは、実は光君にとっては人生の意味を左右するほどの非常な重大事項なのである。その事情からすれば、姫を妻にするかどうかは光君にとって二次的な問題であり、むしろ変に複雑な関係になるのは避けたいくらいの気分もあって、それでも簡単には思い切れずに、いつそ誰かに引き裂かれたくて宮への挑発と言う悪乗りをしたのかも知れない、と思うほどだ。という訳で、実は物語の核心にも触れる要素が満載の姫の話題、と私は読んでいる。だから、未だに光君は内大臣の、夕顔とは常夏への思い、姫とは撫子への思い、を確認していない、という緊張感が物語には横たわっている。などと、つい長文のノートになったが、要するに「ゆかしげ」は身分を損なう恐れではなく、尤も相手が藤氏長者の内大臣だから全く公式の立場に影響が無いとは言えないが、基本的には殿の個人的な確執として内心でこだわっている＜藤原兄との因縁への意識＞であり、今となっては自分の歴史である＜夕顔との若い日の思い出＞なのであり、それらを「無き様には持て成し果てじ(損ないたくない)」という思い、なのだろう。

*なほ(しかし)、さる御心癖なれば(殿はそうした好色な御心なので)、中宮なども、いとうるはしくや思ひきこえたまへる(とても麗しい方と思い申し上げなさるのでしょいか)、ことに触れつつ(折に触れては)、ただならず聞こえ(特別な思いを申し上げ)動かしなどしたまへど(気を持たせようなどとなさったが)、やむごとなき方の(中宮は皇后と言う最上位の方で)、およびなくわづらはしさに(この上なく気が引けるので)、おり立ち(本気になって)あらはし(恋情を打ち明けて)聞こえ寄りたまはぬを(言い寄りとは為さなかったが)、 *「なほ」は上文と同趣旨の事柄をくさらに>加える場合もあるが、此处では上文が自制心であるのに反する事柄を述べるので<しかし>の意。「さるみこころぐせ」は＜そうした好事心、好色心＞。

この君は(この姫君は)、人の御さまも(お人柄も)、気近く今めきたるに(親しみやすく若々しい快活さで)、おのづから思ひ忍びがたきに(つい気持ちが抑えられず)、折々(時々)、人見たてまつりつけば*疑ひ負ひぬべき御もてなしなどは(女房がお見掛け申せば父娘姦淫の疑いを負

いかねない御言動などは)、うち交じるわざなれど(勢いで交わしてしまうが)、*ありがたく思し返しつつ(その度に厄介な間柄だと思い直しながら)、さすがなる御仲なりけり(それでも思い切れない御関係だったのです)。 *「うたがひ」は情事が在ったか如何かの疑念、父娘変態への疑惑。「人見奉り付けば」は<女房がそれと気付けば>なのだから、間柄の実質では父娘ではなくても、表向きはそうに公言しているので、女房たちが殿の言い寄りを父娘変態と見間違ふ、という疑義である。それに、この「御もてなし」は相当に際どい言い方だ。単に口説き文句を言っただけでないことは確かだ。手を取ったり、髪を撫でたり、肩を抱いたり、はしたのだろう。読者によっては、絶対に情交したと確信する人も居るかも知れない。何せ人目の無い二人きりの場面である。そう読ませることを可能にする書き方、ではありそうだ。マ、「ありがたく思し返しつつ」をスナオに読んで、肉体関係には及ばなかったという建前は破綻していないと認めて置く。何れにせよ、殿が変態露見を恐れるのは、その事の釈明のために内大臣に事情を説明しなければならないが、光君はその内大臣の反応に大きな不安があるからであり、またこの時点での公言は責任を果たすために姫を御方に迎える関係性が決定してしまうが、それでは姫の個性を活かし切れないという物足りなさを感じているからでもある。この姫の個性は特筆に価するもので、今まででも例えば軒端の荻の場合に明示されていた通り、殿は関心を向けた女の全てを面倒見ている訳では無く、自分を頼って来た者を見捨てないという態度なのであつて、別れた女の方が実は多かったのかも知れないが、それにしても、殿が自ら他の男に自分が思いを寄せた女を宛がうか、それを迷うなどといったことは他の女には無かったことであり、やはりこの姫は事情も気質も独特だ。 *「ありがたし」は<好都合に感謝する、嬉しく思う>でもあるが、原義は<在る事が難しい、困難だ>とある。そして、この形容は「おんなか」に掛かる。